

4章 保育の3つの工夫

環境の工夫（アイデアのたね）～様々な人との関わり～

地域の特性や様々な人との交流など園の独自性を活かした、その園ならではの環境の工夫

ケラを飼う～異年齢の関わり～（5歳児）

社会福祉法人長尾会 第2長尾保育園（大阪府）

保育者の工夫

4歳児の時から園庭でよく目にしていたケラが飼える事を凶鑑で知り、子どもたちから「飼ってみたい!」という声があがった。ケラに興味をもっていた子どもたちに、ケラの特徴や食べる物などについて知っていることをみんなに発表する機会を作り、一人ひとりの自信に繋がった。



子どもの姿

3匹のケラを見つけた子どもたち、

A児:「ミミズ食べるねんて!ぼく捕まえてくる!」

B児:「もぐるから土たくさん入れないと!」

C児:「どのくらい土入れたらもぐれるかな…」

D児:「もうちょっと入れないと出てきちゃう!」など、餌を探したり、土の量を考えたりする。

すると、園庭で遊んでいる異年齢児が「これなに-?」と、虫がごに集まってくる。嬉しそうに「ケラっていう虫!」「めっちゃもぐるの上手やで!」「モグラみたいにこうやって!」と手足を動かして真似をして伝えている姿が見られた。

ポイント

「ケラを飼うためには、どのような餌や環境が必要か?」自分たちでよく調べて知っている子どもたちは、異年齢児に対しても、知っていることを自信をもって伝えていきます。探求を満足させる環境だけでなく、日頃から、異年齢児が自然に関われる場があり、情報が行き交うような環境をつくっていることが大切です。

責任をもって育てよう～身近な人々との関わり～

社会福祉法人五倫会 中郷保育園（青森県）

保育者の工夫

畑に植える時にメロンの苗を折ってしまったA児。その後の世話もしきれずに、結局A児のメロンは枯れてしまった。友達の思いを聞く機会を作ったり、本人がどうしたらよいのかを考える場面を作ったりして、家庭とも連絡を取り合い、本人の力で乗り越えられるようにする。



子どもの姿

友達から、「ちゃんと毎日世話をして欲しかった、もう1回植えて育てて欲しい」という意見が出て、A児は、「もう1回植える!」と決断する。

保護者もA児の話しをよく聞き、考えを受け入れるなど快く協力してくれた。時期が遅くメロンの苗がなかなか見付からず、A児は電話帳で調べ園芸店、種苗店などメロンの苗がありそうな所を探し、やっと見付ける。

A児は、毎日かかさず、草取りも水やりもした。が、結局は実らず枯れてしまった。

今回、A児の努力はクラス全員が知っていて、報告をすると、「残念だったね。頑張ったのにね」「メロン、もう1個苗あるから、みんなで分けて食べよ」と言う。

A児は、「やっぱり植えるの遅かったのかなあ?ばっちゃんもメロンとか野菜は植えるのに丁度いい時あるって言ったもん。最初のメロンをちゃんとお世話しとけばよかったな」と言い、植え時があることや責任をもつことの大切さを感じていた。

ポイント

友達・保育者・保護者など身近な人の関わりによって、A児は植物を育てることの大変さや責任を感じる経験ができました。失敗した経験を活かし、植物を育てるためには、生長過程をよく観たりそのものをよく理解したりする必要性に気付くなど体験が深まっていることが推察できます。